
ポケットモンスター トワイライト

absolute

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター トワイライト

【Nコード】

N6699Z

【作者名】

absolute

【あらすじ】

ここ、イツシュ地方の中でも最も大きな大都市と呼ばれている街、ヒウンシティ。そこで暮らす一人の少女、「アヤ」はごく普通のトレーナーズスクールの生徒だった。

しかしある日、彼女の通う学校が、「プラズマ団」と名乗る謎の巨大組織の襲撃を受ける。彼らの目的は、ポケモンの解放。それを、力で知らしめようと言うのだ。

混乱の最中、アヤは、同級生であり、幼馴染である少年「カズサ」
がプラズマ団と密着な関係であると言っ事実を知ってしまう……。

第1話：いつもと変わらない時間（前書き）

こんにちは、absoluteと申します。

慣れない一人称で、しかも主人公が少女なので、少し読みにくいかもしれませんが。

それと、もう一つ小説を書いているので（ちなみに、ポケモンの二次創作です）、更新が遅いかもしいませんが、楽しんで頂けたら幸いです。

第1話：いつもと変わらない時間

ポケットモンスター、縮めてポケモン。

この世界で人間と共に暮らしている、不思議な生き物。

ポケモン達の種類は、今現在 確認されているものだけでも、目が回るほどの数がある。

そして世界には、まだ未発見のポケモンも沢山いるらしいから、その数は日に日に増えていく。

ポケモンの数だけ出会いがあり、ポケモンの数だけ物語がある。

4

そんな無限の可能性を秘めた世界に、この街はあった。

この国を幾つかの地方に分けた時、この辺は『イツシュ地方』と呼ばれている。

あまり大きな地方じゃ無いけど、学者の間の中ではとても興味深い伝説や、発達した機械技術などでその名は広く知られているみたい。そして、今あたし達が住んでいるこの街、『ヒウンシティ』は、イツシュ地方の中でも飛び抜けて大きな街、いわゆる大都市だった。

天まで届くんじやないか、とまで思ってしまう程の大きなビルが並ぶ摩天楼。昼夜問わず人ごみで溢れている大通り。

たまに嫌になっちゃう時もあるけど、あたしはこの街が好きだった。

「う……ん……」

そんなヒウンシティの朝。あたしは制服姿で、重たい瞼をゴシゴシ擦りながら通学路を歩いていた。

ピュウと音を立てて吹く北風が、あたしの栗色の髪を揺らす。

この辺りは、大きなビルが数多く並んでいるから、この時間帯は太陽の光が全く当たらない。そして今の季節が冬と言う事もあって、体感気温は一段と寒かった。

一応、制服の下にカーディガンを着ているけど、あんまり役に立ってない。

そう、あたしは学生。『ヒウン・トレーナーズ・ハイスクール』
って言うポケモントレーナー育成のための学校に通う16歳。

ポケモントレーナーと言うのは……皆さんご存知の通り、ポケモンと共に生き、ポケモンと共に成長していく……そんな人達のこと。

あたしはポケモンが好きだから、トレーナーになろうと思ったんだけどね。

「……………眠い……………」

とぼとぼと通学路を歩きながらも、ついつい口から本音が漏れてしまう。だって……………昨日は訳あってあんまり寝てないんだもん。仕

方ない……よね？

訳って言うのは……その……まあ、色々だよ！色々……。

「……アヤ！」

眠気を覚ますために瞼を擦りながら歩いていると、不意に後ろからあたしの名前を呼ぶ声が聞こえた。って……この声の主は……多分あたしが今 最も会いたくない人物。

あたしはある人物の顔を思い浮かべながら、恐る恐る後ろを振り向く。

「うわ……」

あ……あたしの予想は的中してしまった……。思わず変な声を出してしまう。

黒い髪は耳に掛かるくらいの長さで、薄いブルーの瞳。間違いない。

「カズサ……」

あたしは不機嫌そうな口調で、その人物『カズサ』の名前を口にする。

ただでさえ寝不足なのに……。こういう時に限って、カズサとばったり会ってしまう。

「朝っぱらから不機嫌な所を見ると……今日も寝不足なんだろう？」

すると、カズサが小馬鹿にする様な口調でそんな事を言った。余

計なお世話よ！

あたしは、周りの人からよく「寝不足のアヤは機嫌が悪い」と言われる。……まあ、自覚はあるんだけど。直そうと思っても、なかなか出来ないんだよね……。

そんな事もあって、よくあたしをからかってくるカズサとは、こんな日の朝に会いたくないんだよね。

「しょうがないでしょ！昨日は色々と忙しかったんだから……」

そんなカズサの言葉に対し、あたしはそう言い返した。

ちなみに、あたしとカズサは幼馴染で、通っている学校も全く同じ。だから、遠慮無くこんな事が言える。でも、少しきつく言い過ぎたかな……？

そんな風に思っていたのも束の間、カズサは口元を緩め、微笑を浮かべた。

「大方、学校の課題が終わらなかつたんだろ？　ギリギリまで溜めておくから、そんな事になるんだ」

そしてカズサは、またもや小馬鹿にする様な口調であたしにそう言った。

「う……うるさいわね！　だって……その………しょうがないでしょ！」

うう……あたしはカズサに凶星を突かれてしまった。思わずむきになって、カズサを怒鳴ってしまう。

あたしがむきになればなるほど、カズサも面白がってからかってくる。

分かっているけど、言われればなしって言うのもちよっとね……。

「何が、しょうがない、だ。大体、いつまでも課題を放つたらかした、お前が悪い」

「だ……だから！ 理由があるの！」

むむう……。流石カズサ……。一步も譲らない……。でも、あたしも負けないんだから！

「へえ……。じゃあ、一体どんな理由だ？」

「えっ……。？ いや……。その……。も、もういい！」

……。でも、やっぱり結局負けたあ……。どうしてもカズサに勝てない……。

って、あたし何やってんだろ……。何だか無駄な時間を過ごした様な気がする……。

フとあたしは、通学路に立てられている時計をしてみる。

今は八時二十五分か……。ん……。？この時間は……。

「ち……。遅刻！」

カズサと言い合ってて、すっかり時間を忘れてた！

あたし達の学校の最終的な登校完了時間は八時半だから、このままじゃ遅刻しちゃう！

「もう！ これも全部カズサの所為だからね！」

「……………僕の所為にするなよ……………」

あたしは最後にカズサを怒鳴ってから、慌てて走り出した。学校まではまだ少し距離があるけど、このペースで走れば、恐らくきつと大丈夫……………なはず。

ヒウン・トレーナーズ・ハイスクール

「つ……………疲れたあ……………」

あたしは、倒れ込む様にして自分の席に着いた。あれから死にも狂いで走って……………なんとか遅刻せずに済んだ。……………冬だったから良かったけど、夏だったら絶対に汗だくだったなあ……………。朝からこんな思いするなんて……………。

肝心のカズサはというと、あたしと同じペースで走ったのにも関わらず、涼しい顔をして席に座っている。

相変わらず、意外と体力あるんだからなあ……。そこは羨ましい……。

「どうしたんだ、アヤ？ 今日はいつも以上にぐったりしてるな……」

心のなかでブツブツ文句を言っていると、あたしの前の席に座っている女の子が声をかけてきた。

「シオン……。だって、カズサが……」

あたしはその女の子、『シオン』にそう言った。

シオンは、あたしの一番の友達なの。ちょっと冷たい印象を持たれがちだけど、本当はとっても優しいんだよ？

それに、ルックスも結構いい。

銀色の髪は綺麗に分けられていて、肌も綺麗。足もスラリと長いし……。はあ、羨ましいなあ……。

「何だ？ またカズサと何か揉めたのか？ 最近は多いな……」

「うーん……。でも、原因は全部カズサにある！ あたしは悪くないんだから！」

あたしは、シオンにそう返した。

……。でも、本当に最近のカズサと言いつている回数が多い様な……。き、気のせいよね！ あたしは悪くないし……。

「何だ何だ？ アヤとカズサって、本当に仲がいいんだな！」

すると、今度は後ろの席からそんな声が聞こえた。って、一体何言ってるの！？

「ちょ……リュウヤ！ あんた何言ってるのぉ？ あたしとカズサは、全然仲なんか良くないんだから！」

あたしは後ろを振り向いて、声の主『リュウヤ』に思わずむきになってそう言った。

リュウヤもあたしのクラスメイトで、暗い金髪の頭をしている。ポケモンバトルは結構な実力だけど、勉強がちょっとね……。まあ、あたしも人の事言えないんだけど。

「別にむきになる事無いだろ」

「む……むきになんかなってないじゃない！」

「落ち着け、二人とも。そろそろHRホームルームが始まるぞ」

あたしとリュウヤが言い合っていると、ため息交じりにシオンがあたし達を宥める。

「うっ……」

それを聞いて、あたしは口を閉じた。

……今日は何だか朝から騒ぎっぱなし。お陰で眠気も覚めちゃった……。

と、とりあえず一端 落ち着こうかな……。ふう……。

「それよりアヤ。慌てて来たのはいいが、ちゃんとポケモンを連れて来たのか？ 今日にはポケモンが必要な授業があるだろ？」

自分で自分を宥めていると、シオンがそんな事を尋ねてきた。

「え……？あ……勿論！ あたしがミジュマルを忘れる訳無いでしょ？」

上の空で聞いていたから、ちょっと反応が遅れたけど、あたしはシオンの質問に対し、そう答えた。

あたしは鞆の中からモンスターボールを取り出し、シオンに見せてみる。

あたしの手持ちはラッコポケモンの『ミジュマル』一匹だけ。けど、この子は、あたしの大切なポケモンなんだ。だって、あたしの初めてのポケモンなんだもん。

そんな事していると、教室のドアが開いて、あたし達の担任の先生が入って来た。

そろそろHRが始まる……。

これがあたしの日常の始まり。
平凡で、退屈な時もあるけど、ほとんど毎日が楽しかった。

……でも……、

あの日……、こんな日常がガラリと変わってしまっなんて、今は
まだ、思ってもみなかった。

第1話：いつもと変わらない時間（後書き）

読んでくれた皆様、ありがとうございます！

アヤの一人称を「私」にするか、「あたし」にするかで、かなり迷いました……。

結局、「あたし」になりましたが、いかがだったでしょうか？

これから宜しくお願いします！

感想や評価を、楽しみにしています！

それにしても……キャラのルックスの描写が……（汗）

第2話・予兆（前書き）

今回は、思ってたより更新が遅くなってしまいました……。

では、第2話、お楽しみください。

第2話：予兆

「おっはよー！」

ガラツと音を立てて、教室のドアが開いた。

今日のあたしは朝から機嫌が良かった。だって、昨日はぐっすり眠れたし、登校中にカズサと揉めなかったの。と言うか、会わなかったんだけどね。

そう言う訳で、今日は何時よりも調子が良いの！

寝不足の時のあたしと、そうでない時のあたしは、機嫌がかなり違う。……自分で言ってるんだから、本当に自覚はある……。けど、直そうとは思ってるんだよ？

ま、まあ とりあえず、今日は何だか幸先が良いって事！

「よお、アヤ！ 今日朝からテンションが高いな！」

右手を上げて、朝の挨拶をしながら教室に入って来たあたしを見て、リュウヤが声をかけてきた。

何時もと変わらない明るい笑みを浮かべ、相変わらずのテンションであたしに話しかけて来る。

「うん。だって、昨日はちゃんとぐっすり寝たし」

そんなリュウヤに対し、あたしは席に座りながらそう言った。

「本当、アヤの機嫌は寝不足かそうじゃ無いかで大きく変わるな」

「うっん……。でもまあ、いいじゃん！ 気にしな〜い」

今度は席に座って腕を組んでいたシオンが、そんな事を言って来たけど、あたしは緩い口調でそれをかわそうと試みる。

シオンならきつとスルーしてくれるよ！……な〜んて、思っていたけど、

「気にしなきゃ駄目だろ。周りの奴らにも、迷惑かけてると思うぞ？」

やっぱり、駄目……？ あたしはシオンから手痛い反撃を受けてしまった。

「うっ……はい……」

あたしって、シオンには弱いんだよね。

なんだか、言葉に説得力がある……って、言うのかな？ シオンの言う事は大抵 合理的だし、場の雰囲気をよく考えた感じ。だからかな？ なんとなく素直に受け止めた方が良さそうな気がする。

「うっ……相変わらずシオンは暗いな！」

けど、ここに場の空気が読めない人が約一名。

相変わらず暗い、て……今のシオンは、暗いとは別の意味だと思っけど……。

「……確かに、私は暗いかもしれないが……、あんたは少し明るすぎだ」

すると、少し呆れた様な口調で、シオンがリュウヤに言った。まあ、そうなるだろうね……。

「なんだよ、別にいいじゃん！ 減るもんじゃ無いし」

シオンの言葉に対し、リュウヤはそう答えた。

……確かに明るい過ぎって事は無いと思うけど、シオンはもう少し場の空気を読み、って言いたかったんじゃないかな。多分……。

「……………」

ふう、とため息をつきながらもシオンは言葉を失う。

リュウヤの単純な解釈に対し、あたしもちよっと呆れてしまうから、シオンはかなりのものじゃないかな？

「あー、でもほら！ リュウヤって、元気だけが取柄なんだから、別にいいんじゃないかな？」

何だか変な雰囲気になってしまった場を和ませるために、あたしは二人に向けてそう言った。

うーん、我ながら良い配慮！ 本当にリュウヤの取柄とか、特徴と言ったら元気な所くらいだし。

他について言われても……うーん……左利きの所？

「おいおい、アヤ。元気だけ、って何だよ。俺はポケモンバトルが得意って特徴もあるぜ！」

するとリュウヤはあたしの言葉の中のそこが気に食わなかったらしく、補足説明を入れる。

……でも、自慢出来る程の事かな？

確かにあたしよりは強いと思うけど、カズサの方が実力は上だし。

あれ？ そう言えば……。

「そう言えば、まだカズサは来てないの？」

あたしはその事に気づき、シオンに尋ねてみた。

もうすぐ朝のHRが始まるのに、まだ来てないみたい。

あいつが遅刻する事なんて、滅多に無いのに……。何かあったのかな？

「……さあな。カズサに関しては、アヤの方が詳しいだろ。何か言って無かったのか？」

「……いや、これと言って何も……」

どうやら、シオンも知らないみたい。

そりゃそうか。流石のシオンでも、カズサの事まで把握している訳ないし。

あれ……？ でもあたしの方が詳しいって、何で思ったのかな？

……幼馴染だから……？ うん、きつとそう。絶対そう！ あたしはシオンを信じてるから！ シオンはカズサやリュウヤみたいに、そんな事をネタにあたしをからかったりしないんだから！

あたしは頭の中で勝手に納得し、うんうん、と首を縦に振っていた。

そんな事を話している内に、既に時計は八時半を回っていた。

今日も、あたしのいつもと変わらない日常が始まる。そう、思っ

ていた。

午後

ふう、やっと五限目の授業が終わったあゝ。これで残すは六限目の授業のみ！もうひと頑張りだね。

あたし達の学校の授業は、一日に大体 六教科ある。午前 四教科やって、午後 残りの二教科をやる感じで、お昼ご飯の後にやる五限目は、とりわけ眠くなっちゃうんだよね。

五限目の授業は、ちょっとうつらうつらとしちゃったけど、完全に居眠りした訳じゃないから大丈夫だよな？ リユウヤに関しては、鼾をかいて眠ってたし。先生が何回か注意をしていたけど、起きてはまた眠り、起きてはまた眠り、の繰り返し。お陰で、全然授業が進まなかった様な……。

「リユウヤ、いい加減 起きたらどうだ？」

ついに見ていらなくなっただのか、シオンがリュウヤにそう言った。言うか、五限目はほとんど寝てたのに、終わった今でもまだ寝ていられるなんて……。流石に、寝不足のあたしでもそこまでは寝ないよ……。

「うん……ムニヤムニヤ……。もう朝かあ？」

渋々と言った感じで、リュウヤが頭を上げた。

……寝ぼけてるみたいだけど、そんなので六限目、大丈夫かなあ……？ 絶対また寝るよね……。

「ほら、早く目を覚まして！ 六限目もあるんだから……、流石にもう寝てられないでしょ？」

あたしも思わずリュウヤを起こそうとしてしまう。だって、これ以上寝たら、体内時計がおかしくなって、昼と夜の区別がつかなくなっちゃうよ。

それはあたしが既に実証済み。って、自慢になる事じゃないか。

「リュウヤ、そんなに寝てばかりで授業は身に入ってるのか？」

するとシオンがリュウヤにそんな質問を投げかけた。

「そうだよね。このままじゃ、またテストで赤点を取っちゃうんじゃないの？」

「心配ないって！ 俺は常に夢の中で授業を受けてるから！」

「ちょ……ええ、何その答え……？」

「……そんな訳ないだろう」

シオンも苦笑してる……。でもこの答えは笑っちゃうよね。
もう16歳なんだから、もうちょっとまじな言い訳を考えようよ…
…。

「フフッ……」

あたしも口に手を当てて笑ってしまう。

まあ、しょうがないよね？ 態々 笑いを我慢する事ないし。

「な、なんだよ。笑うなよ」

最後の抵抗、と言わんばかりにリュウヤがそう言った。

その言葉とおどけた顔を見て、何だか可笑しくなって……。あたしはまた声を出して笑った。それにつられて、シオンまで笑っている。

「お、おい。シオンまで……」

リュウヤは少し焦った様な表情をしたけど、やっぱり耐えられず、
つられて笑ってしまった。

シオンが学校で笑う事は結構珍しいから、あたし達は少し驚きの
表情を浮かべながらも、笑っていた。

……その時、

ブーブーブー……

あたしのポケットの中に入れておいた携帯が震えた。

「え……?」

ちよつと驚いた様な声を出しながらも、あたしはそれに気づく。ポケットの中の携帯の震えは、しばらく経つても治まらない。つまり、これはメールじゃなくて電話と言う事になる。

誰からだろ? こんな時間に……。

あたしはポケットの中から折り置まれてる携帯を取り出し、それを開く。そして、その携帯のディスプレイに映っている発信者名を見てみた。

「なつ……!?!」

うっ……嘘でしょ……!?!

その名前を見て、あたしは驚愕していた。だって、そこに映っていたのは……。

「……アヤ、誰からだ?」

驚いた様子のあたしに気づいたシオンが、真剣な口調であたしに話しかけてきた。

ちよつと反応が遅れたけど、あたしはディスプレイに映っている名前を読み上げた。

「……カズサ……から」

「カズサ?」

それは、朝から学校に来ていない、幼馴染の名前だった。
遅刻も欠席も滅多にしないし、成績も悪くない。所謂 いわゆる 優等生が、
何の連絡も無しに学校を欠席している。ちよつと不振に思ったけど、
風邪とかかなと勝手に解釈していた。
そんな奴から、今頃になって電話がかかってきた。

……こんな時間にあたしにかけてくるなんて……一体どう言うつ
もりなの……？

「おいアヤ、出てみるよ」

興味を示したりリュウヤが、あたしに電話に出るよう促す。
警戒はしていたけど、あたしはリュウヤに言われるまでもなく、
電話に出るつもりだった。と言うか、カズサはあたしの幼馴染だし、
そこまで警戒しなくていいか。

「うん……」とリュウヤに頷いた後、あたしは通話ボタンを押し
て、携帯を耳に当てる。

「……もしもし？」

とりあえず何時もよりは真剣な口調で、あたしは電話越しの発信
者に向かって、そう言った。

『アヤ……か……？』

すると、発信者も声をかけてきた。

……やっぱり、この声はカズサ。

ふう、と息を吐いた後、あたしはまたカズサに声をかけた。

「一体、何のつもり？ 学校にも来てないし……。何かあったの……？」

あたしは何時もカズサに話す時の感じで、そう尋ねた。

でも、これでも結構心配するんだよ？ 学校に来てないカズサが、こんな時間に電話をかけてくるなんて……。明らかに普通じゃない。

あたしが質問した後、しばらく何も言わなかったけど、カズサはようやく口を開いてくれた。

『アヤ、今は黙って僕の言う事を聞いてくれないか？』

「へ……？」

か、カズサは何を言ってるの？ それに、あたしの質問は無視？ またあたしをからかうつもりなのかなあ……。と、思いつつも、あたしはカズサの話の続きを聞く。

『いいか？ 今すぐ学校の裏門まで一人で来てくれ。今すぐだ』

「ちょ……あんた何言ってるの？」

ほ……本当に何いってるの？ いきなり裏門に来いって言われても、何の理由も言わないんじゃない、不信任を抱かれてもしょうがない。

『……今は詳しい事は言えない。時間が無いんだ。だから急いでくれ。いいな？』

「ちょ……ちょっと待って、カズサ！」

ブツンッ

そこで、カズサは電話を切ってしまった。

……結局あたしの質問は全部 無視？

でも、今のカズサはかなり真剣な口調だったなあ……。あんなに真剣な口調のカズサの声なんて、滅多に聞かない。あたしと話すときは、大抵からかうような口調で話すのに……。今は違った。

「カズサ、何だって？」

通話の内容がよっぽど知りたかったらしく、真っ先にリュウヤがあたしに声をかけてきた。

「よく分からないけど……、黙って一人で裏門まで来いって……」

「裏門？」

あたしが言い終わった後、口を開いたのはシオンだった。怪訝そうな口調で、あたしの言った事を繰り返す。

「お？ こりゃもしかして、愛の告白ってやつか？」

「バ、バカ！ そんな訳ないでしょ！」

リュウヤが余計な事を言ったので、あたしもそう言い返した。

……ほ、本当に絶対違うよ？ なんだか、焦ってる感じだったし。

強いて言えば、そこは危ないから早く逃げろって感じ。

「それで、行くのか？ 裏門に……」

腕を組んで考え込んでいたシオンが、あたしにそう尋ねてきた。

「うん。なんだか焦ってるみたいだし……。今回は、あたしをからかっている訳でもなさそうだしね」

「そうか……」

シオンは、警戒はしているけどあたしが言うなら止めはしない、って感じだった。

そんなシオンに悪いな、と思いつつも、あたしは立ち上がって教室の出入り口まで行く。

「それじゃ、ちょっと行ってくるね。先生には、適当に伝えといて」

「おう！ 任せておけ！」

最後に二人にそう伝えてから、あたしは教室を後にした。

裏門かぁ……。ここから結構遠いな……。

この後あたしは、そんな呑気な考えも吹き飛んでしまう程の事実を知る事になってしまう……。

第2話：予兆（後書き）

なるべく最初の方は明るい話を多くしたいと思ってるのですが、作者はシリアスな話の方が書きやすいので……。ちよくちよくそんな話を入れていくかもです。

第3話・隠しごと(前書き)

皆さん、少々遅くなりましたが、あけましておめでとございませう！今年もよろしくお願ひします！

アヤ「うん……」

お？アヤ、前書き初登場だな。

アヤ「absolute、これどつ言ひごと？」

え？何が？

アヤ「分かつてんでしょ？今回の話」

え？あ、まあ、うん。最後がね……、ちよつとね……。

アヤ「ちよつとじゃないでしょ。……この作品は、明るくするんじやなかつたっけ？」

で、でも、ちよつとはシリアスな話もあった方が……、はい、すいません。

第3話・隠しごと

授業開始のチャイムが鳴り響く中、あたしは一人 裏門へ向かっていた。

チャイムが鳴って、慌てて教室へ駆け込む人もいれば、そんな事はありませんにせず、のんびりと教室に入っていく人もいます。まあ、チャイムが鳴ってるのに、教室に戻ろうとしてないあたしもどうかと思うけどね。

さつき、あたしの携帯にかかってきた電話。

カズサがあんな事を言うなんて思った事も無かったから、ちよつとビックリしたなあ……。急に裏門に來い、て……。一体なんのつもりなのやら……。

あたしは昇降口に向かい、靴に履き替えてから裏門に回る。

今日は雲一つ無い、いい天気！うん、気持ちいい！

授業が始まったとは言え、校内からはまだ話し声が聞こえる。

絶対、クラスに一人くらいは居るよね？頭の切り替えが遅い人多分、そんな人がいつまでも喋ってるんだろうなあ……。何時もの事だから、あんまり気にして無いけど。

この学校の裏門へ行くには、校舎の周りをぐるっと回らないといけない。

昇降口を出て、体育館がある校舎方面に向かって歩きだす。

途中、先生とかに見つかりと面倒な事になっちゃうから、ついコソコソとした動きになってしまう。べ、別に、変な事は考えてない

よ？ただ、やっぱり見つからないに超した事は無いでしょ？

そんな風に歩いていると、ようやく裏門に到着した。

正門と違い、ここは何だかシーンとしている。

裏門は、その名の通り学校の裏。だから、一段と通りを通る人数も少ないんじゃないかな？

けど、そこにそいつは居た。

学校指定の制服は着ていない。

その代り、黒っぽいコートと、地味な色のズボンを穿いていた。

「……あんに言われた通り、一人で来たよ。一体、何のよう？」

そんな恰好のカズサを見て、あたしはさらに不信感を強める。だって、こんな恰好って事は、学校に来た訳でも無さそうだし……。かと言って、体調が悪くて学校を休んでいた訳でも無いみたい。だったら、態々 学校まで来ない。

「ねえ、聞いているの？」

けど、いつまで経ってもカズサは口を開かない。

まったく……。またあたしをからかっているのかな？だとしたら冗談じゃないよ……。こっちは授業を放ったらかしにしてまで裏門まで来たんだから。

そう思っていると、ようやくカズサは口を開いた。

「……上からの命令だ」

「…………え？」

え？え？な、何のこと？

カズサが言った内容は、あたしには理解出来ないものだった。だって、そうでしょ？命令って、何のこと…………？あたしをここに呼び出したのは、誰かに指示されたからってこと…………？

「まったく…………上の連中は、何を考えてるんだろつな。お前だけは傷つけるな、だつてさ」

次にカズサが言った言葉を聞いて、あたしの頭の中はさらに混乱した。

もう！何の事を言ってるの！？話の内容が、全くつかめないよ！

こうなったら、とことん問い詰めてやるんだから！

「一体、何のこと…………」

しかし、あたしの言葉はその時 響き渡った大きな音によって、掻き消された。

ドーン！という大きな音が、空気をも震わせる。

「な、何！？」

こ、これって、爆発音じゃない！？

あたしは、弾かれるように爆発音がした方を振り向いた。

そこは、紛れもなく学校だった。もくもくと煙が立ち籠めていて、

よく見ると火事にもなっているみたい。

こ、これ、大変な事になってるじゃない！明らかに、意図的に爆発が起きた感じ。それも、学校の中から……。何が起きてるの！？

「カズサ！？」

だけど、ここに詳細を知ってそうな奴がいる。

こんな時間にあたしを呼び出し、よく分からない内容の言葉を発していた、この人物。それに、こんなにタイミングよく爆発が起きるなんて、不自然すぎるじゃない！

「これって……。一体どういう事！？」

あたしは、怒鳴るようにしてカズサに質問した。

けど、カズサは大きな爆発が起きたのにも関わらず、表情を崩さないまま黙り込んでいる。

その様子を見て、あたしはカズサがこの爆発の事を何か知っているかと確信した。

そして、また爆発が起きた。今度は、二度、三度と……。

だけど、今度のは、さっきの爆発とは少し違っていた。

『全生徒に告ぐ！』

放送用のスピーカーから、何者かの声が響いた。

この声……。聞いた事が無い声……。と、いう事はこの学校の先生とかじゃない。じゃあ、一体誰……？

けど次の瞬間、そんな疑問は解消された。

『我らは、この世界のすべてのポケモンに癒しを与え、世界をより良いものへと、進化』させる者、プラスマ団である！』

「プラスマ……団………？」

スピーカーから発せられる声。その主は、自分達のことをプラスマ団と名乗った。

プラスマ団………？聞き覚えがあるような無いような……。

『既にこの学校、ヒウン・トレーナーズ・ハイスクールは我々によって包囲されている！命が欲しければ、大人しく我々の要求を呑め！』

え………？これって、脅迫だよね？既に包囲してるって……、それじゃあプラスマ団は、かなりの数がいるって………？

『我々の要求、それは諸君らのポケモン達の解放だ！』

「か、解放………？あっ！」

あたしはプラスマ団の要求の内容を聞いて、ようやくその事を思い出した。

そうだった………。すっかり忘れてた……。

プラスマ団。それは、数年前から社会の表舞台に姿を現すようになった、宗教団体の名称だった。彼らは、姿を現すと同時に、ただ一つの事を人々に訴え始めた。

それが、ポケモン達の解放。なんでそんな事を訴えているのか、あたしには詳しいことは分からないけど、その訴えは虚しく、人々には受け入れられなかったみたい。それでも、プラズマ団はいまだにその事を訴え続けているらしい。

そこまでは、まだ大丈夫だと思う。けど……。

「今聞こえた通りだ、アヤ。僕達プラズマ団は、ポケモン達を人々から解放するために、交渉を行っている」

「なっ……!？」

カズサは、ただ淡々とそう答えた。

「僕達、プラズマ団？交渉？なに言ってるの!？こんなの、一方的に脅迫しているだけじゃない！」

「ちょっと待って！プラズマ団？あんたがプラズマ団だって言うの!？どうして!？だって、プラズマ団は……」

「プラズマ団は僕が信じる正義だ」

「っ!？」

カズサはあたしが言葉を言い終わる前に口を開いた。

その言葉を聞いたあたしの反応は、驚愕。ほ、本気で言ってるの……?」

「プラズマ団がしている事は、合理的だ。僕達は長きに渡って、ポケモンの解放を人々に訴え続けてきた。だが、人々はこれを、いかれた宗教団体の言うことだと揶揄し、聞き入れなかった。なら、力で知らしめるしかないじゃないか」

「あなた、何言ってるの!？」

あたしはついに聞いていられなくなり、怒鳴った。

「合理的?これのどこが合理的だって言うの!?明らかにテロじゃない!」

あたしが必死に叫んでも、カズサは表情一つ変えない。

こんなカズサ、初めて見た……。何時もと違う。どこか、明らかに違う……。

「こうとでもしないと、人々は分からないじゃないか。現代社会に暮らす人々は、共存して暮らすだの、共に成長するだの、そんなくだらない御託を並べて、ポケモンを一方的に支配し、利用している。しかも、それに気づいてない人も沢山いる。だから、教えてやるんだ」

カズサ……?本当にどうしたっていうの……?

カズサの今の瞳は、決意に満ちていた。今回は、あたしをからかっている訳じゃない。本気なんだ……。でもそうになると、いつからカズサはプラズマ団だったのかな……。?それに、ずっとそれを隠していた事になる。

こんなに近くにいたのに、あたしは全く気付かなかったなんて……。

あたしがひどく驚いていると、また爆発が起こった。

今回は、さつきよりも大きな爆発。ズウンと音を立てて校舎が揺れている事が、ここからでも見受けられる。

「シオン……、リュウヤ……！」

あたしは居ても立っても居られなくなり、ついには校舎の方へと駆け出そうとした。

「……どこに行くつもりだ？」

しかし、それをカズサに引き留められてしまう。
どこに行くって、そんなの決まってるじゃない！

「あたし一人だけがこんな所で隠れて見てるなんて、そんな事出来るわけじゃないじゃない！校舎の中には、まだシオンもリュウヤもいるのよ！？助けなくちゃ！」

あたしは、カズサを怒鳴りつけた。

今のカズサには、本気でこっちの思いをぶつけないと、分かってくれないと思う。

「悪いが、逃がす訳にはいかない。命令だからな」

けど、カズサはあたしの進攻方向に回り込み、校舎に近づけないようにしてしまった。

……何で？どうして？そこまでして、達成しなきゃいけない命令なの？あたし一人なんかを助けても、プラズマ団には何のメリットも無いはずなのに……。

こうなったら、力づくでもどいてもらわなくちゃ……。

「いい加減にして！命令命令って、どうしてそこまでするの！？ど

うしてプラズマ団が正義だって言い切れるの！？あんた達がやってる事は、正義でもなんでもない！ちよつと考えれば分かるでしょ！？」

「……………」

「今すぐそこをどいて！……………どうしてもどかないって言うなら……………」

あたしはモンスターボールを取出し、中のポケモンを出す準備をする。

ミジユマル……………。本当はこんな事をやって欲しくないけど、今は早く皆の所に向かわなきゃ……………。あたしが何を出来るかなんて分からないけど、こんな所で一人で優々と生き残るよりはずっとマシ……………。

「ミジユマル！お願い！」

そして、あたしはモンスターボールを投げた。

地面に当たったボールが独特の解放音を響かせた後、中にいた一匹のポケモンが出現した。

水色のお腹には、ホタテを模したような物がついていて、白い顔には雀斑のような斑点が浮かび上がっているのが特徴の二足歩行のポケモン。

あたしのパートナーであり、唯一の手持ちポケモンだった。

「……………僕に与えられた命令はこうだ」

あたしがミジユマルを出したのを見て、カズサは少し後ずさりしつつも、静かに喋り始めた。

「この作戦決行の直前、アヤの身柄を保護しろ……。しかし、抵抗するのならば、力づくでも構わない……」

そう、カズサは言った。

……と言う事はカズサも抵抗するって事……。簡単にはいきそうに無いね……。

「いいわ。どこからでもかかってきて！でも、あたし達は絶対に負けないから！」

あたしは喧嘩腰に、カズサに言った。

それを見たカズサも、覚悟を決めたみたい。モンスターボールを取出し、バトルの準備に入っている。

「……残念だ。こんな形でお前と戦わなくちゃいけないなんて……」

そう呟いた後、カズサはモンスターボールからポケモンを出した。

「ゼブライカ、行け」

ゼ、ゼブライカあ……。そんな……。確か、ゼブライカは電気タイプだったはず……。相性最悪じゃない……。

雷電ポケモン、ゼブライカ。シマウマのような姿をしたそのポケモンは、その別名からも分かる通りタイプは電気。水タイプのミジユマルは、相性だけで見れば不利。

だけど、それは常識範囲内の話。ポケモンバトルはタイプだけでバトルが決まる訳じゃない。

何とか急所を狙えば……。

「と、とりあえず……、ミジュマル、“水鉄砲”！」

あたしがミジュマルに技の指示をすると、それに応じたかのように短く鳴き声を上げ、“水鉄砲”の準備をした。

スウウと息を吸い込む様な動作をすると、ミジュマルの口に大量の水が溜められる。

……原理は分かんないんだけどね。

ある程度 水を溜めた後、それを勢い良く口から発射した。その名の通り、それは鉄砲をイメージさせる様な形で、ゼブライカを目掛けて飛んでいく。

「その程度の攻撃……」

しかし、ミジュマルの“水鉄砲”が当たる直前、ゼブライカは素早くジャンプしてそれをかわしてしまった。

うう……惜しいなあ……もう少しだったのに……。

「次は僕等の攻撃だ。ゼブライカ、“スパーク”」

すると今度は、カズサのゼブライカが攻撃態勢に入った。

腰を少し低くしたかと思うと、身体のだこかに蓄積されていた電気が、ゼブライカを包んだ。そしてそのまま、ゼブライカはミジュマルに向かって駆け出した。

電気を見に纏ったまま、相手に突進攻撃を仕掛ける技、“スパーク”。やっぱり電気タイプだから、この攻撃を受けると、致命的な

ダメージになりかねないかも……。

「ミ、ミジュマル！かわして！」

あたしは慌てて、ミジュマルに回避の指示を出す。あたしに言われるまでもなく、ミジュマルは攻撃をかわそうとするだろうけど、一応ね。

だけど、ミジュマルも焦っていたみたい。少しオロオロとしていたけど、何とか真横に飛び込み、攻撃をかわせた。……良かったあ……。

「すばしっこさだけは、一人前だな」

「すばしっこさだけ、て何よぉ！」

カズサが小馬鹿にするように言って来たので、あたしもそれに言い返した。

こんな所だけみると、何時もと変わらないかもしれない。けど、今目の前にいるカズサはもう、あたしの知っているカズサじゃないんだ……。

あたしはもう一度、心に訴えかけた。

「なら、これならどうだ？ゼブライカ、“電撃波”」

「えっ………？」

カズサはまた、ゼブライカに技の指示をした。

それに素早く反応したあたしは、もう一度ミジュマルに攻撃をかわすよう、指示しようとした。

だけど……、それは叶わなかった。

一瞬。一瞬だった。

ゼブライカから放たれた電撃は、常識外れの物凄いスピードで、ミジュマルを襲った。当然、ミジュマルは反応する事は出来ない。ミジュマルからして見れば、訳の分からないまま、だったのかも知れない。

ミジュマルは悲鳴を上げ、そのまま吹っ飛ばされた。

「ミ、ミジュマル!？」

だ、大丈夫なの!？あたしはミジュマルの安否を確認する。

息はあるみたいだけど、完全に気を失っているみたい。目を回してぐったりしている。

嘘……!？一撃……!？確かに相性は悪かったけど……。やっぱり、バトルの経験の差ってやつなのかな……？

「僕達の勝ちだな」

「うう……」

く、悔しい……。確かに勝ち目は無かったかも知れないけど、せめて少しくらいダメージを与えたかった……。

それよりも、シオン達を助けに行けない、と言う所の方がずっと悔しい。あたしがこんなに無力だったなんて……。

あたしが悔やんでいると、カズサは静かに口を開いた。

「……ゼブライカ、ミジュマルに止めを刺せ」

「……えっ!？」

「ただ、カズサが口にしたのは、思いも寄らぬ事だった。止めを刺す……?ど、どという事……!??ミジュマルはもう戦える状態じゃないはず……。」

「と、止めて……どという……事……?？」

「あたしは、恐る恐るカズサに質問した。や、やな予感がする……。」

「決まってるだろ。完全に戦える力を失わせてやるんだ」

「っ!？」

「え……?それって、命を絶つ……てこと……?」

「ま、待って!ミジュマルはもう戦える状態じゃないでしょ!なにどつして……」

「これはお遊びじゃない。殺し合いだ。生かしておく理由はない」

「な、何をいつてるの!?それじゃ、さっき言った事と矛盾してるじゃない!」

「プラズマ団は、すべてのポケモンに癒しを与えるんじゃないの!?言ってる事が違うじゃない!」

「違くない。ミジュマルには、‘死’と言う名の癒しを与える。永

遠の、安らぎだ」

「っ……………!?!?」

カ、カズサ……………? 本当に、どうしたって言うの……………? こんなもの、絶対におかしい……………。おかしいよ……………。何が、何があったって言うの……………? どこで……………間違えちゃったの……………?

「止めて!止めて止めて!!カズサは……………カズサは絶対にこんな事しない!ポケモンを殺したりなんか……………絶対に……………!あんたは……………本当に、カズサ……………なの……………?」

あたしは叫んだ。必死に、叫んだ。でもそんな叫びを聞いても、カズサは顔色一つ変えない。まるで、心を失ってしまった人形のように……………。

「ハア……………。僕はカズサだ。正真正銘のな。……………お前も負けたんだから、いい加減認めろよ」

冷たい。あまりにも冷たい。

ゼブライカは、今にもミジユマルに止めを刺そうとしていた。

ゼブライカとミジユマルには、大きなレベルの差がある。今なら簡単に、ミジユマルの命を奪う事が出来ると思う……………。

目の前にいるのは、紛れもなくカズサのはず。だけど、あたしには別のものに見えていた。

第3話・隠しごと（後書き）

長い割には、ぎこちないですね……。精進しないといけませんね……。

やっぱりシリアス（？）結局シリアス（？）な話になってしまいました……。

基本的には明るい話！と息込んだ自分は何処へやら……。
すみません……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6699z/>

ポケットモンスター トワイライト

2012年1月6日22時50分発行